



PCAPS 活用事例と看護師による計画立案事例の比較

医療法人財団利定会 大久野病院 4F 回復期リハビリテーション病棟

【はじめに】

PCAPS（患者状態適応型パスシステム）とは、患者状態を基軸として、複数の目標状態がリンクされ分岐・結合を形成しながら患者の最終目標に至るまで、個別的な観察ケアを提供できるシステムである。今回 PCAPS を使用した事例と従来どおり看護師による看護計画で行った事例を比較、検討し慢性期病院での PCAPS の有用性があることがわかりその結果をここに報告する。

【方法】

PCAPS を使用した患者と従来どおりの看護師による看護計画に基づいた観察、ケアの記録を抽出し、比較、検討した。

【結果】

PCAPS 使用患者の観察・ケア・記録は複数の看護師が関わってもヌケ・モレが少ない結果となった。従来どおりの看護師による看護計画に基づいた事例では、複数の看護師が関わることによりヌケ・モレが多い結果となった。また、記録に関しては、実際日々行っているが記録に残されていない項目もたくさんあることがわかった。

【考察】

疾患ごとに医師が必要とする観察項目と看護師が必要と考える項目に差がある。看護師の立案する計画には経験や知識の差がありバラつきがある。このことから観察・ケア・記録に関して個々の力量に左右されたためにヌケ・モレ・不必要な観察・ケアが行われているのではないかと考えられる。行われた観察・ケアの記録を見る医師からは記録に無い項目は行っていないものに見えてくることもわかり、医師の数が少ない慢性期での PCAPS 活用は、有用性があると考えられる。